

# ヘリによる救急医の搬送訓練を初めて実施 〈成田空港〉旅客機がオーバーラン、炎上したとの想定で



成田空港では航空機を利用されるお客様の安全を守るため、常日頃から航空機事故などの災害に迅速に対応できるよう、訓練を行っています。その一環として1月13日、ヘリコプターによる救急医の搬送訓練を初めて実施しました。以下、訓練の内容を紹介します。

## 概要

### 千葉大附属病院、成田市消防などの協力で

1月13日（水）強風の中、千葉大学医学部附属病院、千葉市消防局、成田市消防本部の協力を得ながら、千葉市消防局所有の消防防災ヘリコプターによって、救急医の搬送訓練が実施されました。訓練は、成田空港内で旅客機がオーバーラン・格座炎上したとの想定の下で行われ、NAAが事故後直ちに千葉大学医学部附属病院と成田市消防本部に、それぞれ救急医の派遣要請（千葉大）と救急医の空輸要請（消防）を実施し、これによって救急医の空港到着までの所要時間を測定し、要請受信後の病院内での対応を確認し、加えて救急医の成田空港到着後、当該救急医による第2次トリアージ（重症者措置）を実施するという内容でした。

実際の事故では、数十人規模の重症者が同時に発生することもあり（例えば、2000年台北でのシンガポール航空6便の事故など）、この場合には全ての重症者を直ちに相応の病院に収容することが必ずしも容易ではありません。こうした事態に対応するための方法のひとつを確認することが訓練の目的でした。

## 背景

### 実用的な対応を求められる「救急救命」

1995年の阪神淡路大震災以降、大規模航空機事故の場合も含めて、救急救命のあり方は整備・改善が重ねられています。一例として医療の分野では、04年に東京DMAT（Disaster Medical Assistance Team）が成立し、千葉県

でも07年にDMATの手続が策定され、09年には羽田空港での航空機事故緊急計画に東京DMATが追加されました。東京都と千葉県を含む全国規模の対応でもすでに日本DMATが設立されています。DMATとは、事故現場等の被災地で医療活動を行うために、救急医を中心に編成されるチームのことで、この制度の制定は病院外における専門医による救急措置の充実化を意味しています。

医療に限らず、こうした新しい動きに対応して、成田空港でも既存のあり方との調和を図りながら、空港の当事者として大震災等との比較で大規模航空機事故に適合する形を積極的に提示し、関係者の協力を求め、事故時には最新でかつ実用的な対応が行えるようにすることが必要不可欠です。

今回の訓練はこの新しい動きに対応するもので、その主眼はヘリコプターの活用（千葉市と成田市との共同は初めて）、そして救急医、看護師、薬剤師という小規模なチーム（3名）による、病院外での専門医による救急措置の実施態様を検証することにありました。

## 諸外国

### 欧米では一般的なヘリコプター活用

ヘリコプターによる医療関係の搬送の歴史はすでに新しいものではなく、米軍の場合で見れば、ベトナム戦争では、今でも陸上自衛隊が汎用として使用しているUH1型ヘリコプターが負傷者の後方への搬送を盛んに行っていました。

そして、現在ではこうした救命のためのヘリコプターの活用は、欧米では当たり前のように普及しています。近年、日本でもドクターヘリの普及が漸く積極的に行われるようになりましたが、例えばこの分野で先進国のドイツでは、全ての国土を15分半径（飛行範囲15分の意味）の円が網羅するように、救急のためのヘリコプターが配置されています。この配置が1998年の高速鉄道脱線事故（エシュデ事故）の際に、39機のヘリコプターによって、約200名の負傷者を、事故現場から半径約150kmに位置した22の病院を中心として、事故発生後約2時間で搬送することを実現させました。1970年代に生まれた、「重症でも、専門医が受傷後1時間以内に治療を開始すれば回復する可能性が高い」という救急の考え方に照らせば、このドイツの実績が大きな意味を持つことが理解されます。今回の訓練は、こうした目標に向けての成田空港の第一歩といえます。

